

研究ノート

## 震災遺構として残された被災校舎と残されなかった校舎 ——東日本大震災の経験をどのようにして、そして、何を伝え残すのかⅡ——

村上 美奈子

立正大学データサイエンス学部講師

### The School Buildings Preserved to Learn about Tsunami in 2011 and those that Removed to Rebuild the Town

——How Should We Tell and Teach the Experience of the Tsunami  
and the Disasters to Next Generation? Ⅱ——

Minako MURAKAMI

Lecturer, Faculty of Data Science, Rissho University

#### 要旨

2011年の東日本大震災から10年半が過ぎた。被災した広範囲にわたる地域の多くでは震災の継承、および犠牲者の慰霊のための施設や公園などが整備されていて、その中にはいくつかの被災した校舎も震災遺構として残され、内部も含めて見学ができるようになってきている。

本稿においては、震災遺構として整備された学校の教訓を横断的にまとめるとともに、一方、遺構として残されなかった学校にも教訓として残しておく事柄が多くあることにも注目し、学校防災への理解を深める手がかりやきっかけの一つとしたい。

キーワード：東日本大震災、遺構、学校

#### はじめに

2011年の東日本大震災から10年半が過ぎた。被災した広範囲にわたる地域の多くでは新しい市街地が造られ、また、国からの補助金なども活用しながら震災の継承、および犠牲者の慰霊のための施設や公園などが整備されている。それらについては、「3.11伝承ロード」としてリストアップされ、現地で震災の教訓を学ぶ際の<sup>(1)</sup>手がかりになる。

その中にはいくつかの被災した校舎も震災遺構として残されていて、内部も含めて見学ができるようになってきている。例えば、見学が可能な宮城県仙台市若林区の荒浜小学校や宮城県石巻市の大川小学校については、朝日新聞で不定期に連載されている「てんでんこ」に、今年の4月と7月にそれぞれ、「荒浜小の子はいま」①～⑤（「てんでんこ」806～810 2021年4月20日～24日）、「遺された大川小」①～⑤（同821～825 2021年7月27日～31日）と題する関連記事が掲載された。

震災遺構については、特に大川小学校のような大きな犠牲の現場となった建物等については、その保存について住民の中に様々な思いがあり、大川小学校のように議論が二転三転しながらも保存に向けて整備されるようになったものもあれば、大槌町役場、釜石市防災センター、気仙沼第18共徳丸のように苦渋の議論を重ねた末にすでに取り壊されてしまったものも数多くあり、また、南三陸町防災庁舎のように結論は保留となっているものもある。

これらの議論に関しては、広島原爆ドームや長崎の浦上天主堂の保存をめぐる<sup>(2)</sup>のいきさつなどにも言及しながら様々な立場から意見が交わされてきた。

大川小学校で犠牲になった子どもたちの遺族の一人である佐藤敏郎さんと、釜石で中学3年生の時に避難を体験した菊池のどかさんの対談を、2021年2月に、本学が関連する地域のイベントで聴く機会があった。大川小学校は遺構として残されたが、他方、釜石東中学校と鵜住居小学校の校舎は取り壊されて2019年にはラグビーワールドカップの会場となった鵜住居スタジアムが建設された。さらに、すぐ近くで多くの犠牲者が出てしまった釜石防災センターも、様々な議論を経て取り壊され、新しく伝承と追悼のための施設が作られた。しかし、そこでの議論に参加したのは住民や当事者だけでよかったのだろうか、ということが語られていた。このイベントでは「未災地」という言葉をよく使う。すでに被災した以外のどこの地域であっても今後災害などで被災する可能性はあり、どこに住む人であっても当事者として災害に備えていかなければならない、という意味が込められている。

「3.11伝承ロード」の中には、学校だけではなく様々な遺構が含まれている。学校教育に関わる者として、震災の教訓を教育の場でどのように伝承していくのかということは大きな関心事である。学校の震災遺構について、個々の学校の震災時の経験や校舎保存に至った経緯、遺構としての活用の様子については、特に建築関係の雑誌でいくつもの記事があるが、学校教育の立場から、横断的にそれらの学校遺構を概観し考察したものは見られない。

本稿においては、震災遺構として整備された学校の教訓を横断的にまとめるとともに、一方、遺構として残されなかった学校でも教訓として残しておく事柄が多くあったことにも注目し、校舎が残されていない現在、現地のどこでならばそれらの学校の経験に触れることができるのかを紹介したい。

それらの学校が残した教訓に対して、単純に成功例失敗例と区別して言うことはできない。たとえば、「釜石の奇跡」として大々的に成功例として報道された釜石の子どもたちの避難でも<sup>(3)</sup>、最初に避難していた場所にそのままとどまっていたら津波に遭っていた。たまたまその場所で落石が起り、それで危ないと気づいてさらに高いところへ避難したという。そのようなこともあったので、成功例として一方的にもてはやされることに当事者は戸惑いも感じている。後述するが、宮城県の気仙向洋高校も、岩手県陸前高田市の気仙中学校も、最初の避難場所にとどまっていたのは、津波から逃れることができなかったのである。

校舎の屋上に避難してギリギリで難を逃れた宮城県山元町の中浜小学校の例も合わせて、事前の備えは絶対的な必要条件として、それに加えてのその場での校長らの精一杯の判断や地域住民の訴えと、また、幸運も重なって、無事に避難を達成できた事例も多い。

釜石東中学校では、防災教育を徹底していたとはいえ、大地震後に訓練通りに校庭で点呼を取っていた生徒たちに、校舎内に残っている生徒がいないかどうかを点検していた教員が気づいて、「そんなところに並んでいないで早く高いところに逃げろ！」と指示を出し、生徒たちは即刻避難を開始したということである。

また、気仙中学校では、その年度に新しく着任した内陸出身の校長が、海の目の前の学校で

あることから備えが必要だと感じて、着任早々に教頭から避難場所を案内してもらって心づもりをしておいたが、実際には避難した先のその場所でも安全ではないと判断してさらに高いところに避難させたという。

そこから言えるのは、備えは虚しいというのではなく、様々な場所での様々な経験を知って、そこから教訓を得たり、さらに様々な場合や状況を想定して訓練や準備を重ねたりすることが重要であるということである。

## 1. 宮城県石巻市立大川小学校

本稿で、震災遺構として残された学校をどの順番で紹介するのか、ということにも、配慮が必要である。既述したように、成功例と失敗例を単純に比較するべきではないと考えるからである。しかし、ここでは、このたびの震災で大きな犠牲が発生してしまった大川小学校を冒頭で紹介し、この大きな犠牲を忘れずに、学校防災において最重要な教訓としたい。

大川小学校では、全校児童108名のうちの74名と10名の教職員が犠牲になった。絵本『ひまわりのおか』（ひまわりをうえた八人のお母さんと葉方丹・文／松成真理子・絵、岩崎書店、2012年）には、大川小学校の子どもたちやその遺族が描かれている。また、大川小学校の被災については、裁判の内容に触れたもの等、多くの本が出されているが、在日20年の英国人ジャーナリストであるリーチャード・ロイド・パリーらによる『津波の霊たち——3・11 死と再生の物語』（早川書房、2018年）は、遺族たちとも出会い、その地域のことなども丁寧に取材した内容がまとめられている。

また、大川小学校については、以下のような論稿もある。

- ・徳水博志「大川小学校事故の教訓を生かした防災教育」『災害文化研究』第4号、2020年3月、pp.17-31
- ・佐藤敏郎「未来をひらく場所 旧大川小学校校舎について」『建築ジャーナル』2018年3月号、pp.12-14
- ・三上昭彦「〈大川小学校の悲劇〉と〈釜石の奇跡〉をどうとらえるか」『人間と教育』2013年3月号、pp.78-85

大川小学校の遺構は、2018年11月下旬に最初に訪れた。学校の向かいの敷地に観光バスなども駐車できるようになっていて、私が昼頃に到着した時には、団体客が案内を聴き終えて帰っていくところだった。2021年になって震災遺構としての整備が完了して7月から一般公開が始まったので、10月上旬に2度目の訪問をした。学校の隣に新たに建てられた「大川震災伝承館」の建物では、当日の時系列での解説や裁判の資料などが閲覧できる。三陸自動車道を河北インターチェンジで降りて大川小学校に向かおうとするとすぐに「上品の郷（じょうほんのさと）」という道の駅があり、そこでも、「大川伝承の会」のコーナーで、大川小学校の被災に関する展示を見ることができる。震災からちょうど1年後の3月11日に、私は震災でやはり大きな被害のあった石巻市の牡鹿半島を視察するバスツアーに参加していたのだが、その時にも「上品の里」に寄り、当時は被災した車などが見学できたが、今はその車は撤去され、震災についての

情報は大川小学校の展示がメインになっている。

また、本学では、熊谷キャンパスにある「ボランティア活動推進センター」に関わりのある学生たちが、聖学院大学など近隣の大学の学生たちや熊谷の隣接市である鴻巣市にある「埼玉県防災センター」の職員らとも協力して、2019年2月と2021年2月に、「未来をひらく」というテーマでイベントをおこなってきた。2019年の時には、大川小で二女を亡くされた佐藤敏郎先生や、当時5年生で、津波に流されて肩を骨折しながらも救出された只野哲也くんの証言を聴くことができ、また、2021年には、コロナの影響でオンラインになってしまったが、やはり佐藤先生と、釜石の菊池のどかさんの対談を聴くことができ、只野くんはVTRで震災から10年の今の心境を語って寄せてくれた。2019年のイベントの時に佐藤先生や只野くんが喜んでしたのは、それまでは、震災の体験を一方的に語るために招かれることが多かったが、このイベントでは、もちろん体験も語りつつ、そのうえで、参加者も一緒にこれからの防災について考えて議論するというスタイルであるということだった。2021年のイベントの時に、佐藤先生は前回のイベントを振り返って、あの時は哲也くんがいつになくたくさん震災の経験を語っていた、と回想していた。

今回大川小学校を訪れてみて思ったのは、よく大川小学校に関して、なぜ避難を開始した時に津波の方向に向かって走っていったのか、という疑問が投げかけられるが、俯瞰的に当時の状況を知ることができる今となつては、海からだけではなく川の堤防を越えて津波が来たということを知っているが、当時としては、単純に海から遠い方へと逃げようとしたのだと理解した。しかも、細い道を通ってすぐに行き止りになっていたということから、指示を出した教員もパニックになっていて冷静な判断ができていなかったと考えられる。

宮城県名取市の閑上では、津波が来ているというのに冷静さを欠いて、知人の様子を見ようと車で沿岸部へ向かっていて、子どもの「死にたくない」という一言で我に返って避難を始めたという証言がある。また、後述する荒浜小学校では、全校児童のうち本人以外の家族全員を亡くした児童が2名いるのであるが、その亡くなった家族は、1年生の子どもは友達の家族と一緒に避難できていたのに、自宅付近でその子を探し続けて津波の犠牲になってしまったということである。三陸では「津波てんでんこ」ということが言われ、それぞれが避難していることを信じて、津波が近づいている時に探しに行ったりするのではなくそれぞれが避難する、ということが言い伝えられているが、宮城県太平洋岸の平野部では、津波はもっと北部の三陸のこととして他人事のように考えていた人も多かったようで、備えが十分ではなかったり、パニックになってしまったりして犠牲になった事例も多かったようである。

また、今回、大川小学校の建物を見て思ったのは、後述する中浜小学校では、1989年の校舎建設の際に2mの嵩上げをして、そのことが吉と出たが、大川小学校の建物は、ほぼ同時期の1985年に建設され、とてもおしゃれな構造ではあるが、上層階に避難できるような構造にはなっていないと、津波での被害が全く想定されていなかったということである。海岸から400mの所にある中浜小学校と海から3.7km離れた大川小学校とを単純に比較することはできないが、当日の教員の判断やそれまでの訓練のあり方だけではなく、そもそもこの場所のこの建物が建設

される際に、津波を想定していなかったのだと気づかされる。

しかし、大川小学校の場合は、中浜小学校と違って、すぐ横に山があった。けれども、大地震で山の木が倒れたり山が崩れたりする可能性を考えると危険だという判断もあり、山には避難しなかったということである。

走って避難する際に、川ではなく学校のすぐ横の山へ避難していれば、その場所は児童もシイタケ栽培で登っていた場所なので問題なく津波から逃れることができたはずである。実際、地震後に教室から校庭に避難した際にも、担任によってはすぐに山に行くように指示を出していたところもあったが、まずは校庭で点呼を取ってからということで、山に登ろうとしていた児童も呼び戻されたようである。そして、いつも利用していたスクールバスも方向転換を済ませて待機していたということで、避難する方法は複数存在していたのである。しかし、逆に複数あったからこそ一つに決めることができず、避難を決行することもできないまま多くの犠牲を出してしまったことが極めて残念である。地震当時は校長が不在であったということである。避難を実現するための指示を現場のリーダーが的確に出すこと、また、次の釜石の事例のように、子ども自身が避難することの大切さを学び、実践できるように様々な事態を想定しながら訓練を繰り返していくことが重要である。

## 2. 岩手県釜石市立鵜住居小学校、釜石東中学校

震災直後には「釜石の奇跡」と呼ばれていた釜石東中学校と鵜住居小学校の避難行動については、絵本『つなみてんでんこ はしれ、上へ!』（指田和・文／伊藤秀男・絵、ポプラ社、2013年）で詳しく描かれていて、また、2019年3月に鵜住居に建てられた「いのちをつなぐ未来館」には、絵本の原画やエピソードが展示されている。

この絵本の作者である指田和さんはこれ以外にも2冊、釜石での震災の絵本を出していて、また、広島原爆を題材にした4冊の絵本や阪神淡路大震災の絵本の作者でもある。熊谷の隣の鴻巣市にお住まいで、2019年2月の防災センターでのイベントに来られていた時に本学ボランティアセンタースタッフの渡邊さんの仲介で知り合いになった。その年の10月には熊谷キャンパスに講演に来ていただいて、社会福祉学科の2、3年生のいくつかのゼミが参加して、震災や戦災の絵本ができるまでのエピソードなどを聴かせていただいた。

釜石では震災前の2004年から、当時群馬大学で災害社会工学の研究をしていた片田敏孝氏の指導を受けながら防災教育に力を注ぎ、防災カリキュラムを整備していた。その成果が震災の時に発揮され、多くの子どもたちやそこから影響を受けた大人たちが無事に避難をして命を取り留めた。その一連の防災教育やその効果については、以下の記事が参照できる。

- ・森本晋也「震災を生き抜いた子どもたちに学ぶ——釜石東中学校の元生徒たちへの聞き取り調査から」『歴史地理教育』2019年2月号（特集 東日本大震災8年後のいま）
- ・「内外教育」2011年5月13日「岩手県釜石東中学校村上洋子副校長に聞く 偶然でなかった『釜石の奇跡』」
- ・「東日本大震災に学ぶ防災教育の新しい基本」『総合教育技術』2012年4月号増刊（震災と

学校現場) pp.70-75

- ・「それでも教育は未来をつくる～釜石市立鶴住居小学校の新学期を訪ねて～」『総合教育技術』2012年4月号増刊（震災と学校現場）pp.100-104

さらに、本学のボランティアセンターは、震災以来ボランティアやスタディツアーを組織し続けているが、この2年間ほどはコロナの影響でオンラインでの実施となっている。2021年2月には、当時、「いのちをつなぐ未来館」のスタッフとして勤務していた菊池のどかさんの講演を聴く機会を設け、熊谷と品川の両方のキャンパスから合わせて20名ほどの学生が参加して、とても貴重でリアルな体験を聴くことができた。菊池さんは、2020年3月頃には、釜石の復興のポスターでもその仕事に向かう姿勢が紹介されていたり、また、NHKのニュースや民放のラジオ番組などでもコメントを求められたりしていたが、2021年3月末で退職されてしまったということで、私たちはかけがえのない証言を聴くことができたということになる。

菊池さんの講演では、大きな揺れが来た時に頭に浮かんだことや3mの津波予報が出ていてそれで済むわけがないと思ったこと、避難する途中で子どもも大人もパニックの連鎖になっていたこと、道のない山道を逃げる中で、一緒に避難していた小学生の目の高さの植物をよけようとしてトゲのある植物を握ってしまい、それが毒がなければいいと思ったことなど、体験していない者は想像もしてこなかったリアルな情景が語られた。また、避難して一晩を過ごすことになった建物では、持ち出し袋の中に懐中電灯を入れてきてくれた子が、その懐中電灯のおかげでみんなの避難が助かったのだが、その子は疲れてしまって、ピリピリとした雰囲気の中の建物の中でイビキを立てて眠り始めてしまい、周りの生徒たちが必死に起こそうとしていたこと、それから、震災後に1人ずつの状況が違っていく中で同じ方向を向けなくなっていったことや、初めは配られる食べ物に感謝していた避難者が、精神的な辛さが増してくると、避難所でボランティアとして自分は食わずに食料を配っている菊池さんに対して、「もっとよこせ」と怒鳴るようになったりと、当時中学を卒業し高校に入学する時期に体験した過酷な状況が語られた。

### 3. 宮城県山元町立中浜小学校、山下第二小学校

中浜小学校の震災当時の様子や校舎の保存に当たっては、以下の資料が参照できる。このうち、門間裕子先生の文献は、自分たちで作った『中浜小学校物語』の紙芝居を実演しながらの講演会の記録であり、本稿では書き尽くすことのできない中浜小学校での津波への様々な備えをこの紙芝居から読み取ることができる。門間先生は、震災当時中浜小学校の1年生のクラスを担任していた。震災遺構を訪れると、震災当時の各学年の生徒数や担任の名前が書かれた職員室の黒板も残されていて、その中に門間先生の名前を見つけることができる。また、校舎2階で見ることのできる映像資料でも、門間先生など、当時の先生方の証言などを聴くことができる。

- ・門間裕子「大津波の記録『中浜小学校物語』」石井正己・やまもと民話の会編『復興と民話：ことばでつなぐ心』三弥生書店、2019年、pp.128-137

・本江正成「山元町震災遺構中浜小学校——遺構保存のデザインプロセスから——」『建築防災』2021年3月号（特集 東日本大震災から10年）、pp.26-31

宮城県山元町立中浜小学校には、2020年9月26日の一般公開開始の日に見学した。その前後に大雨や強風が心配され、またコロナ禍でもあり、わざわざ見学に行くべきかどうか迷ったが、公開初日だからこそお会いできる人や聞ける話もあると考えて出向いた。

一般公開開始のセレモニーがあり、報道の取材もいくつか来ていて、また、震災当時の校長先生や6年生と1年生の担任教諭、当時の在校生や地域の人たちも来ていて報道陣に囲まれて取材を受けたりしていたので、震災時のいろんな話が聞こえてきた。

中浜小学校は震災当時、各学年単学級で全校児童が59名のこじんまりとした学校だった。校舎は2階建てで、震災の時は学校にいた子どもたちと地域の人たちが屋上の倉庫で津波を免れて極寒に耐えながら一夜を過ごし、翌朝校庭からヘリコプターで全員が無事に救出された。総勢90人の命を守った建物として、震災遺構として保存し公開されることになった。

一方、中浜小学校の近隣に位置する山下第二小学校は、別の選択を取った。中浜小学校のような垂直避難ではなく、児童を教職員の車に分乗させての水平避難を行ったのである。中浜小学校遺構で閲覧できる資料には、大きな戸惑いとためらいを抱えながら児童を自家用車に乗せて避難した山下第二小学校の教職員の証言も残されている。

震災では、車で避難する途中に渋滞に巻き込まれたまま多くの人が津波の犠牲となったこともまた事実であり、車で避難しないというのが今も原則ではあるが、実際には、山下第二小学校の他にも、例えば宮城県名取市の閑上保育所など、大地震直後に子どもたちを教職員の車に分乗させて、災害時に備えてシミュレーションしておいた渋滞を避けるルートを通して、子どもたち全員を無事に避難させた例はある。

中浜小学校に話を戻すが、中浜小学校も全員で屋上に避難して安泰だったわけではなかった。屋上への避難を決断した校長は、大地震が起こった14時46分の3分後、14時49分に発表された大津波警報では高さ6 mの津波が10分後に到達するという内容だったので、予め決めておいた避難先まで全員で移動するには子どもたちの足では間に合わない、それよりは、2階建ての建物が1階辺り4 mで、建物の土台の部分は2 mの盛土の上にあることを判断材料として、垂直避難を決断したという。また、倉庫の中に避難させることによって、子どもたちが津波を見て恐怖を感じることを避けられる。しかし、屋上で子どもたちが避難した倉庫を背に海を見ていた校長は、建物の倍の高さの津波が小学校に到達しようとしているのを目にすることになる。

その高さの津波が小学校に到達する直前に、その波に引き波が当たって、小学校の目の前で海からの津波の高さは半分になり、屋上の倉庫は津波に遭わずに済んだ。とはいえ、倉庫の窓のところから波のしぶきが入ってくるようなこともあり、倉庫の屋上に子どもを登らせて少しでも助かる確率を高くしようと試みている大人もいたという。

また、この震災では、夜間の過酷な寒さがしばしば語られているが、中浜小学校の屋上もその例外ではなかった。倉庫は普段、学習発表会の衣装が収納されている場所で、2階の教材室

の中にある階段から上がる構造になっている。避難した子どもたちは6年生も含めて、この避難の時に初めて教材室の中に屋上へ上がる階段があることを知ったという。倉庫に保管されていた衣装を床に敷いたり身体に巻いたりして少しでも寒さをしのぐようにしたということである。屋上の倉庫も含めて津波で壊れた校舎の内部なども見学が可能で、倉庫に散乱した衣装もそのまま当時の状況を物語っている。

その寒さの中、毛布を保管しておいた体育館の倉庫は津波で体育館ごと壊れてしまった。夜になって水がある程度引いたタイミングで、流された体育館の倉庫に男性教員数名が毛布を探しに行ったところ、落下した天井の板によって毛布は流されずに済んでいて、また、毛布もアルミの袋に包んだままであったため、屋上の倉庫に運んで防寒に使えることになった。2日前の午後に役場から配られたばかりの50枚の毛布だった。2人で1枚ずつではあるが、その毛布が使えたことは幸運だった。

幸いにも犠牲者を出さなかった学校もたくさんあったが、それぞれにギリギリの選択と行動と、そこに重なった多くの幸運の結果であった面も多くある。犠牲者が出なかったという結果だけを見て絶対的な成功例であるということにはならない。

だからといって、備えやシミュレーションが無駄ということにはならず、その逆である。

#### 4. 宮城県仙台市立荒浜小学校と七郷小学校、中野小学校

これらの学校については、以下の論考が参照できる。

- ・松岡農「震災遺構の保存と新たなツーリズム——仙台市立荒浜小学校を事例に——」『駒澤大学大学院地理学研究』第48号、2020年
  - ・松本茂章「『文化』の現場を歩く 第28回 仙台市若林区・震災遺構荒浜小学校」『KOMEI』2018年11月
  - ・松村光「震災遺構 仙台市立荒浜小学校」『建築防災』2018年4月号（特集 防災教育 その3）、pp.14-18
  - ・源栄正人「体験談に基づく津波浸水被害を受けた学校の震災時対応の実態——仙台市立荒浜小学校の事例——」『建築防災』2011年12月号、pp.42-45 ※川村孝男校長へのヒアリング
  - ・「震災と学校現場 東日本大震災特別連載 第3回 あの日、教師に求められた対応、役割 宮城県仙台市立荒浜小学校」『総合教育技術』2011年9月号、pp.74-77 ※『総合教育技術』2012年4月号増刊（震災と学校現場）pp.18-21に再録 ※布施勝久教頭への聞き取り
- 荒浜小学校の震災遺構としての整備・公開は、東日本大震災で被災した学校の中では最も早く、2017年4月30日である。同じく仙台市若林区の沿岸近くにあった中野小学校と東六郷小学校も津波で壊れてしまったが、それらの2つの学校は取り壊されてしまった。中野小学校の跡地には津波の慰霊碑と門柱のみが残されているということであったが、2021年の10月に中野小学校のあった辺りに探しに行ったところ、運送会社の基地が広がっていて、学校跡を見つけることはできなかった。一方、東六郷小学校跡地は、門やその横の花壇が残され、向かいの敷地はコミュニティセンターや津波避難ビルが整備されていて、そのコミュニティセンターの中に、



東六郷小学校の記念の品等がいくつか残されていた。

それらの学校の歩みなどについては、「せんだい3.11メモリアル交流館」で、2020年9月に特別展示が行われていた。2016年2月にオープンした「せんだい3.11メモリアル交流館」は、荒浜小学校に公共の交通手段を使って行く際には地下鉄からバスに乗り換える地点となる地下鉄東西線荒井駅にある。

荒浜小学校では、地震発生から約70分後の16時頃に津波が来て、4階建ての建物のうち2階の膝の高さ辺りまで津波が到達したが、学校にいた児童71名と教職員16名、233名の地域住民らは3階や屋上に避難して助かった。翌朝5時から夕方までかかって、ヘリコプターのホバリング（ヘリを上空にとどまらせて1人ずつ救出する手段）等によって170人が、残りの人たちは、午後になって水位がある程度下がってから校舎を歩いて脱出した。その一方で、学校外にいた児童1名が母の車で1年生の妹を探していて、母子ともに犠牲になってもある。

荒浜小学校に関して特筆すべきなのは、東日本大震災の約1年前に発生したチリ地震の際に日本の太平洋沿岸地域でも広い範囲で津波注意報が出されてたことを受けて、実際に荒浜小学校にはその時は津波は到達しなかったのであるが、避難場所を体育館や校庭ではなく校舎の屋上へと変更し、また、体育館に保管しておいた備蓄物資を校舎の3階に移動させていたことである。前述の中浜小学校で毛布を体育館に保管しておいたことによる不都合を考えると、1年前の津波の懸念を受けての避難場所や物資の保管場所の変更が有効だったといえる。とはいえ、多くの住民も避難してきていたので物資が十分ではなく、子どもたちは寒さに震えながら救助の順番を待ち、教師はカーテンや暗幕を外して暖を取らせた。

また、震災遺構としての荒浜小学校では、3、4階部分に、震災当時の様子やかつての地域の姿等が展示されていて、4階の当時の6年生の教室には、震災後に黒板や掲示板上に残されたメッセージが保存されている。担任教諭や子どもたちがその黒板を伝言板代わりにして励まし合ったり、思い出の写真を元担任が子どもたちに渡せるように用意したり、保護者や地域住民、ボランティアで訪れた人などがそれぞれにメッセージを書き込みながら、それぞれの立場で自分にできることを、心が塞ぎがちな状況の中で懸命に実践していたことが伝わってくる。

さらに、震災遺構の荒浜小学校を出て海の方へ数百メートルほど行くと、津波で壊れてしまった住居跡が震災遺構としてある程度まとまった範囲にわたって保存されている。荒浜小学校に限らず、震災遺構の校舎を訪れると、周りに建物がなく草地在り広がっていたりしていることが多いが（現在は復興公園として整備されているところもある）、多くの学校は、震災前には学校周辺に住宅地などが広がっていた。すっかり変わってしまった地域の姿の中であって、被災したとはいえ校舎が遺構としてその場にあり続けているということは、地域の人たちにとってもそこに確かに住民が暮らした地域があったという証であり、心の支えにもなっているという話を何人もの人から聞いた。かつての街並みの記憶をミニチュアとして残す試みとしては、神戸大学のチームが東日本大震災で壊滅的な被害を受けた多くの地域で地域住民と共に取り組んできた足跡があり、震災遺構の校舎内の展示物として、中浜小学校や荒浜小学校、後述する福島県の請戸小学校等でも往時を偲ぶことができ、かつての住民がそれを囲んで思い出を語る光景を

今なお見かける。

なお、立正大学ボランティア活動推進センターが継続的に年2回行っている「被災地ボランティア&スタディツアー」では、2016年に荒浜小学校やその周辺を見学していて、その時には、荒浜小学校の卒業生であり、本学のボランティアセンターの学生たちと一緒に地域での防災イベントの企画運営に当たっていて交流のあった、聖学院大学の学生に案内をしてもらっている。

## 5. 宮城県気仙沼向洋高校→気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館

気仙沼向洋高校の建物は、2019年3月から「気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館」として一般公開され、同年5月の連休の時に見学したが、夕方の閉館間際に到着したにもかかわらず広い駐車場に車がたくさんあり、多くの見学者が訪れていた。

2013年度に社会福祉学科1年生のゼミを担当していた時に、ラグビー部の学生でこの高校で震災を体験した学生がいて、語る側と聴く側の両方の心理的負担が心配になりながらも、ゼミの時間に震災の時の体験を語ってもらった。避難場所になっていた近くのお寺に行ったがそこも危ないということで高いところにある中学校まで避難した話、結果的には無事が判明したもののすぐには家族の消息が分からなくて不安だった話、ラグビーや学校どころではなくなり、様々な手伝いをした話を聞かせてくれた。

この震災遺構を見学していると、屋上にある説明書きの中に、上記の学生が語ってくれた避難の道筋が示されている。この施設のコンセプトや当時教員だった加藤俊之の被災体験とその後の人生については、以下の記事を参照できる。

- ・佐藤克己「気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館——震災の記憶と教訓を伝える——」『建築防災』2021年3月号（特集 東日本大震災から10年）、pp.32-39
- ・加藤俊之「震災と魂——気仙沼向洋高校での被災体験から」中央大学『中央評論』第73巻1号、2021年 spring

## 6. 宮城県東松島市野蒜小学校→KIBOTCHA

野蒜小学校の建物は、他の震災遺構となった学校とは異なって、現在は宿泊や研修ができる施設になっている。そのような経緯を知らずにたまたま2019年の夏に宿泊先として選んだところ、特に2階部分は屋内の大型遊具が設置されていて、その遊具に登ったりして遊ぶことを通して防災や避難のためのスキルを高めることができるという遊具を見学することができた。この施設については以下の記事が参照できる。

- ・三井紀代子「震災の教訓を伝えるために改修した施設 KIBOTCHA について——あの日から未来を学ぼう～やがて来る、その日のために——」『建築防災』2019年12月号、pp.28-33
- また、荒浜小学校の海側の地域の住居跡も震災遺構として残されていると既述したが、このように、被災した建物が残された地域は周辺に建物が見当たらないので元々寂しい地域だったと思われがちであるが（大川小の佐藤先生の2018年の記事参照）、住宅街などが広がっていて、それぞれにたくさんの思い出がある、人々がそこに生きて生活した土地であった。野蒜小学校

付近では、学校よりも海に近いところにあった旧野蒜駅が震災遺構として残されていて、すっかりリフォームされて津波の爪痕があまり見えなくなった野蒜小学校の校舎では感じる事が難しい震災当時の地域の姿を知ることができ、また、そこまで歩きながら、被災地の現状を知ることができる。2019年に訪れた時には建物のコンクリートの跡などが残っていたが、現在はどうなっているだろうか。

## 7. 宮城県名取市閑上中学校、閑上保育園

閑上地域には、2021年3月に訪れて、「名取市震災復興伝承館」と「津波復興祈念資料館 閑上の記憶」を見学した、前者の施設では、前述のように三陸地域と違って油断していたり冷静な判断力を失ったりしていた証言や、車で迅速に避難した閑上保育園の園長の判断と行動、閑上小学校に児童を迎えに来た保護者に児童たちを引き渡すのではなく、保護者も校内にとどまらせ、そのことによって児童や家族が犠牲にならずに済んだ体験などが紹介されていた。一方で、後者の施設を見学しながらスタッフの人に話を聞かせてもらったところ、閑上小学校の判断もそこだけをとって評価できるものではなく、実際に津波が体育館を襲う寸前に声をかけてくれた人のおかげで多くの人が校舎の上の階に逃げて助かったということを教えてくださった。また、屋上に避難していた子どもたちの多くが、地域が流される光景を目にしている、自宅には祖母がいたのに犠牲になってしまった児童もいたということである。津波を目撃した児童の心のケアも、特にこの地域では震災後の重要な課題であった。

また、閑上中学校では、校舎内で犠牲になった生徒はいなかったものの、当日は卒業式のため地域内の施設の中で卒業を祝うイベントが開催されていて、14名の生徒が犠牲になっている。その中の1名の生徒の母親は、地震の後に建物の近くで走り回っている息子に「津波なんか来ないから大丈夫」と声をかけてしまったそうである。震災の数年後の記事には、その母親が、その息子の声もう思い出せなくなってしまったと嘆く内容が書かれていた。災害でも戦災でも、亡くなった人のことを覚えている人がいる限りは、その亡くなった人は、近しい人の心の中に、生き続けている、そのようなことが難しくなるくらいに年月がたった後になっても、確かに生きて存在したその犠牲者を悼み、教訓を語り継いでいくことが、その犠牲者への供養でもあるという思いを新たにした。

## 8. 福島県浪江町請戸小学校

請戸小学校は、長期にわたり原発事故の避難区域に指定されていたこともあり、震災遺構として公開が開始されたのは震災から10年半が過ぎた2021年10月24日であり、その1週間後に現地を訪れて見学した。

徒歩で40分かかる大平山を越えて避難し、地震当時にすでに下校していた1年生11名を含む93名全員の無事が確認されたのは、原発事故からの避難による混乱で震災から1カ月以上も経ってからのことだったというが、その避難の様子については、以下の2つの絵本で分かりやすく紹介されていて、震災遺構の校舎内でも閲覧が可能である。

- ・『請戸小学校物語 大平山をこえて』NPO 法人団塊のノーブレス・オブリージュ・発行、請戸小学校物語制作委員会・編集、榎田宣行・絵、成清北斗・監修、2015年
- ・『浪江 請戸小学校物語 奇跡の避難』浪江まち物語つたえ隊・制作／いくまさ鉄平・文／絵、2020年

その2冊の両方でも紹介されているが、避難した中には日頃から車いすを使っている児童もいて、担当の先生が砂利道も含めて大平山のふもとまでの道のりを車いすを押し、大平山を登る際には担当が背負って避難したということが絵本にも描かれている。ちなみに、砂利道で車いすを押し際には砂利に前輪が取られやすく、前輪を浮かせると前に進みやすくなるが、そのまま長距離を進むのは大変である。車いすの前輪を持ち上げる持ち手があれば、両脇から持ち上げると負担が減る。実際のこの避難の際の詳細については知らないが、それらも含めて避難の実際の様子を確認しておく必要がある。また、子どもが自分の足で長距離の避難を完遂するためには、日頃から避難を意識して実際に歩いておく訓練などが必要であるが、その辺りの事前の準備については絵本でも遺構でも説明がない。それらについても明らかにしておく必要がある。

また、大平山のふもとに着いてから山の中に入っていき道が分からずに、たまたま野球の練習で来たことがあった児童の案内によって高い場所へ避難できたことや、学校から山のふもとまでの数十分もの避難時間を考えると、津波の到達予想時刻によっては別の手段を取らなくてはならなかったことも、考えておかななくてはならないことである。

## 9. 岩手県陸前高田市気仙中学校

気仙中学校については、2019年9月22日に陸前高田の一本松や気仙中学校の近くにオープンした「いわてTSUNAMIメモリアル」の展示の中に、気仙中学校での当時の避難についての映像資料があり、また、見学できるように整備を進めているということだったので、公開を待っていたところ、2021年6月の「いわて復興だより」（第174号）に見学の情報を見つけた。連絡先が2つ載っていて、一方ではまとまった人数でのツアーしか受け付けていないと言われたが、もう一方にも連絡をしたところ、割高になってしまうがガイドが案内することはできるということだったので、同じく震災遺構としてガイドが同行すれば見学が可能な「タピック45（旧道の駅高田松原）」と合わせて2時間の自転車でのツアーを提案していただき、2021年7月14日(木)の午前中に、関東から移住して復興支援に取り組んでいる若者に案内してもらった。

そのガイドも、私と同じく震災から数カ月もたたないうちに被災地支援に駆け付け、その後も通い続けるうちに、「復興とは何か」を深く考えるようになり、それを卒論のテーマとして、卒業後は地元で3年間社会人生活を送った後に陸前高田で働くようになったということだった。被災地および復興地と関わっていく中で、被災に目を向けるだけではなく、それ以前からずっと続いてきたその地域の歴史や文化等にも目を向け、多くの人たちと出会い、様々なところで出向いてその地域を知り、関わり、さらに、自らが外から来た者でありながら、その地を訪れる人に被災のことやその地域のことを案内しようとする意欲は、被災した他の地域でも出会う

ものではあるが、やはり共感できるものであった。

本題に戻ると、気仙中学校は「はじめに」で紹介したように、その年度に新しく着任した校長が、着任と同時に避難場所や経路を確認し、また、実際の場面での適切な判断によって全校生徒が無事に避難を達成した。

3階建ての校舎の屋上よりも高い水位にまで津波が往復し、今なお2階部分には引き波の時に校舎に入ってきた家屋の屋根が入ったままになっていたりする。流されずに残った黒板には当日の時間割や各授業の持ち物などが書かれたまま保存されている。気仙中学校の学区域は漁村である長部と江戸時代に大いに栄えた職人や商人の町である今泉から成り、両者の対抗意識によって気仙中学校の運動会も大いに盛り上がったということであった。

## 10. 岩手県大船渡市越喜来小学校

越喜来小学校については、震災直後の4月に大船渡にボランティアに行くようになった時にお世話になった方の出身校であり、震災後の比較的早い時期から何度もその近辺を訪れている。越喜来小学校があったすぐ横には、津波で流された様々なものを集めて建てられた小屋や同様にして組み立てられた大型遊具のある「潮目」というカラフルな建造物がある。場所が少し移動しながらも現在も残っているその建物のところには、震災直前の2010年10月に地域の人々の尽力によって完成した校舎の外付けの避難階段についての解説や写真がある。その階段を使うことによって、道路を横断せずに安全に迅速に避難することができた。同様の設備は岩泉町小本小学校でも2009年に完成していて、地震や津波に繰り返し襲われてきたこの土地では、そのような備えができていたところも多かった。

越喜来小学校に設置されていた避難階段や「潮目」については、下記の著書に多くの写真と共に解説がある。

・『潮目：フシギな震災資料館』中村紋子・編／写真、片山和一良・文、ポット出版、2014年

## 11. 岩手県宮古市立鍬ヶ崎小学校、宮城県石巻市立雄勝小学校、石巻市立門脇小学校

以上、震災遺構として校舎が遺された学校や、校舎は残っていないものの、防災教育や、その地域に人が暮らしてきた証といった観点から語り継がれる学校に注目してきた。しかし、岩手や宮城、福島沿岸部をたどっていくと、これら以外にも、様々な学校がこの震災で様々な体験をし、教訓を有していることが分かる。

石巻市の門脇小学校も震災遺構として遺されることが決まり、工事が進められているが、校庭から遺跡が見つかったことで完成予定が約1年遅れ、2022年4月3日からの一般公開が予定されている。

また、岩手県宮古市の鍬ヶ崎小学校は震災前から防災教育に力を入れていて、震災後には「震災伝承室 てんでんこ」を開室し、そちらも教頭先生の案内によって見学させていただいた。震災1週間前の3月3日に避難訓練をしていて、結果的にはそのことが子どもたちを助けたと

いう。3月3日は、昭和8（1933）年に三陸大津波で宮古も大きな被害を受けた日である。以下3点は、鉾ヶ崎小学校の防災教育に関する文献である。

- ・「壊滅した港町の子どもたちを救った大震災1週間前の避難訓練」『総合教育技術』2012年4月号増刊（震災と学校現場）pp.76-79
- ・「小学校での防災教育①津波を何度も体験した地いきの小学校、鉾ヶ崎小学校（岩手県宮古市）の取り組み」「小学校での防災教育②地いきの人々の声を集めて作った未来への『5つの提言』」『語りつぎお話絵本3月11日④支え合ったひなん所』、WILL こども知育研究所・編、学研教育出版、2013年2月
- ・『幻燈会の夜』花坂徹・文／中川智恵子・絵、熊谷印刷出版部、2011年12月

同じ宮古市内で被害の大きかった田老地区では、「たろう観光ホテル」が津波遺構として遺され、近くの「道の駅たろう」にある「たろう潮里ステーション」には、すぐ近くの田老第一中学校の被災状況やその後に地域の手伝いや震災学習に取り組んできた様子をパネル展示によって見学することができる。

さらに、大川小学校の学区域と隣接する地域にある雄勝小学校については、被災した校舎は取り壊されてしまったが、震災後に整備された「雄勝ローズファクトリーガーデン」の防災教育プログラムにおいて、裏山に避難した経路を追体験したり、震災当時に学校で避難を呼びかけた地域の人々の話を聞いたりすることができる。

そして、震災から10年が過ぎてなお、被災した学校での過酷な体験をまだ語り得ない思いをしている人たちがいることも忘れてはならない。子どもたちは全員が無事に避難できたもののその経験が過酷すぎて、また、大川小学校と同じ学校関係者として単純に比較されてしまいがちであることが辛く、津波で町全体が壊滅的な被害を受けた中で、被災した学校の建物を遺すことなど議論にも上らなかった地域もある。また、大川小学校では学校管理下での出来事ということで注目を集めることとなったが、下校途中の子どもたち25名が犠牲になってしまった学校もある。

それぞれの被災地でも未災地でも、災害の教訓を他人事とは考えずに、それぞれの地域に起こりうる様々な事態を想定し、様々な状況を想定した備えを考え、行動して訓練を重ねていくことが大切である。

また、避難を完遂できたところにあっても、ただの美談や成功事例として、都合の悪いことには触れずに自慢話で終わらせてしまうことのないように、さらに様々な状況を想定して検証し続けることを怠らないということが肝要である。

## おわりに

気仙中学校を見学した時に合わせて案内してもらった「タピック45」の建物の入り口には、津波の後にその場所で自然に芽を出した松の木が数十 cm の高さになっていた。ガイドが松の木の年齢の数え方を教えてくれて、伸びてきてから6年目ぐらいになる松の木だと説明してくれた。津波の後に土の中に埋まっていたまつぼっくりが芽を出して今ぐんぐん伸びているのだ。

一本松はレプリカになってしまったが、7万本の松があった高田松原を復活させるためにこの松の子孫たちを植林する試みが続いている、私も数年前にその準備作業にボランティアとして参加した。そうやって人の手で植える以外にも自然と芽を出したまだ若い松の木に希望を見出した。この木が大きく育ったらどうするのかとガイドに尋ねたら、分からないという答えだった。

請戸小学校の震災遺構を見学している際にも、震災の後にコンクリートの割れ目から伸びてきた桜の木が、すでに人間の背の高さくらいになっている姿に出会う。春には花を咲かせているということである。震災からの年月の流れを感じる。その一方で、請戸小学校の隣の敷地には、コンクリートの山、鉄くずの山などがそれぞれ高く積み上げられていて、岩手や宮城では震災後間もない頃に広がっていたそのような光景が、福島の浜通りでは現在進行形であることを思い知らされる。請戸小学校のある浪江町に隣接する双葉町に2020年9月にオープンした「東日本大震災・原子力災害伝承館」は、広大な館内をめぐりながら巨大で異様に立派なスクリーンでの映像をいくつも見学していくことになっている。その建物の中の世界は、いつも国道6号線を通るばかりではなく常磐道の高速を使ってみようと思っただけでも行けども無人の地が広がっていて、穴ようになった窓の向こうに闇しか見えない民家が点在する館外の現実とはあまりに隔絶していて心にモヤモヤとしたものが残るばかりであった。

岩手と宮城に震災後の3年ぐらいでもう100回来たな、というところぐらいまでは数えられたが、その後は数えきれなくなって、さらに2017年からは福島にも行くようになった。ボランティアをすることもあれば、震災に関連するものもしないものもいろいろなものを見て回ったりもした。しかし、よそから来て見聞したり考えたりした震災のことを研究成果としてまとめることは申し訳ないように思っていて、なかなか自分の研究の一部にしていく勇気がなかった。けれども、今は、様々な立場の人が様々な場所から、岩手や宮城、福島に気持ちを寄せ続けることが必要であると考えている。特に福島に関しては、関東に送る電力のための原発によってその地域がどんなことになってしまっているのかを見ていかななくてはならないと思っている。

本稿では震災遺構として残されている学校や、校舎は残されなかったが重要な教訓を残している学校についてまとめたが、このまとめの視点も限定されたものである。コロナ禍での難しさはあるものの、是非多くの人に現地に出かけて、自分の目でそれらの校舎を見てもらえればと思う。震災遺構として整備されたとはいえ、永遠に今と同じように内部が見学できるわけではない。それぞれの学校は津波で被災していて、建物としての耐用年数が短くなっている。内部の見学が安全に続けられるようにするためには、遺構の維持管理コストが地元にとっての負担にもなる。例えば中浜小学校は、校舎の建設が1989年であったことから、校舎の内部が見学できるのはおおむね今後20年間であるという（本江2021、p.29）。その年数がたたなくても、それぞれの校舎の様子や遺構としての活用具合によっては今のような状態で見学ができなくなってしまうことも考えられる。また、見学の際に校舎や解説を見て回るだけでなく、実際にその土地で被災した人等から直接説明を受けることによって、被災状況への理解が深まる（cf. 松岡2020）。

様々な人の話や資料に触れ、また実際の校舎を見学することを通して、学校防災への理解を深める手がかりやきっかけの一つに本稿もなってほしい。

## 注

- (1) 「一般財団法人3.11伝承ロード推進機構の活動について」『建築防災』2019年12月号、p.43。
- (2) 高瀬毅『ナガサキ消えたもう一つの「原爆ドーム」』文春文庫、2013年。
- (3) NHKの番組をきっかけに、当初は「奇跡」と言っていたが、奇跡ではなく備えがあつての結果だったことや、学校の事務職員や当日欠席していた子どもの中に犠牲者が出ていたことから、現在では「奇跡」という言い方はしていない。また、学校のすぐ近くの防災センターでは、そこに避難していた多くの地域住民が犠牲になっていることも忘れてはならない事実である。
- (4) 震災の前に生徒たちが津波への備えを映像作品にまとめたものがある。生徒が仙人に扮していたりして、震災後だったらこのようなテンションでの作品にはまとまっていなだらうと思われるが、この映像作品だけではなく様々な学習活動によって生徒たちは津波に備えていた。震災時には実際に避難行動を率先して、自分たちだけではなく小学生の手を引き、地域の高齢者もそれを見て避難を開始した。また、中学生が予め各戸に配布しておいた避難札も役に立って避難の呼び掛けがスムーズにできたという。この時の子どもたちの避難や避難札については釜石の項の指田参照。
- (5) 門間（2019）p.133では、10mとなっている。なお、釜石東中学校副校長は、「停電でテレビが映らず、低い予報の津波警報を見なかったことも幸いした」と証言している（「内外教育」2011年5月13日）ことを考えると、災害時の情報活用のあり方について、決して単純ではない判断を迫られることを再認識せざるを得ない。